

児童相談所が関与した心理的虐待を 受けた被虐待児の WISC-III 下位検査プロフィール

緒方 康介*

WISC-III Profile of Psychologically Abused Children in Child Guidance Centers

Kohsuke OGATA*

The aim of this study was to investigate the intellectual profile of psychologically abused children (PAC). Participants were 23 PAC and 23 comparison children matched for sex, age (± 6 months), and full scale IQ (± 6 points), tested using the WISC-III, sampled from records in child guidance centers. Results of MANOVA, paired *t*-tests, and logistic regression analysis indicated that PAC scored lower on both Picture Completion and Information subtests. These findings suggest that PAC have less vigilance states, lower achievement on school performance, and/or a difficulty in adjustments to a strange situation.

key words: WISC-III, psychological abuse, child guidance center

日本では 2004 年の改正児童虐待防止法によって配偶者間暴力 (Domestic Violence: DV) を目撃させることが心理的虐待に含まれた (同法第二条)。ただし DV 目撃を除くと心理的虐待の定義は甚だ不明瞭であり (池, 2006), 身体的虐待, 性的虐待, ネグレクトの 3 つには該当しない第 4 の虐待, あるいはその他の虐待といった位置づけを脱しえていない。定義の困難さがあるためか, 心理的虐待を受けた被虐待児 (以下, 心理的虐待児と記す) の心理特性に関する基本的な知見は不足している。しかしながら, 観察されていなくてもすべての児童虐待に情緒的な拒否や暴言が付随していることは容易に推測されるため, 児童虐待臨床の最前線にある児童相談所において, 心理的虐待が児童に与える影響を調べることは喫緊の課題である。緒方 (2007) は心理的虐待児 12 名の計量心理学的知能 (Psychometric Intelligence: PI) を測定し, 平均 PI が 83.08 ($SD=10.16$) で理論平均 100 よりも有意に低かったと報告

している。また数量化 I 類による分析の結果, 心理的虐待は言語性と動作性の PI 差に対しての有意な影響はなかったが, 被虐待児の知能領域における偏りは臨牀的にしばしば観察されており (Frankel, Boetsch, & Harmon, 2000), 言語性と動作性の差ではなく, WISC-III などの下位検査プロフィールを分析することの必要性が説かれている (緒方, 2007)。

本研究の目的は, WISC-III の下位検査プロフィールを分析することで, 心理的虐待児の知的特性を調べることである。

方 法

X 県にある児童相談所のケースファイルから, 心理的虐待による相談受付がなされ, WISC-III を実施している被虐待児 23 名のデータを後ろ向きに調査した。心理的虐待の内容は大半が DV 目撃であったが, 「産まなければよかった」などの否定的言動を継続的に受けているもの, 明白なきょうだい間差別を受けているものもあった。なお心理的虐待で受付されているケースでは, 他 3 種の虐待は重複していないことを確認した。続いていかなる児童虐待も確認されておらず, WISC-III が実施されているケースの中から, 性別, 年齢, 全検査 IQ (Full Scale IQ: FIQ) の 3 つの要因をマッチングさせて対照群の児童 23 名を抽出した。性別に関しては両群ともに男児 9 名, 女児 14 名であった。年齢に関しては各ペアに 1 年以上の差が生じないように心理的虐待児の月齢 ± 6 カ月の誤差範囲でマッチングした。心理的虐待群の年齢は平均 10 歳 5 カ月 ($SD=33$ ヶ月) で対照群の年齢は平均 10 歳 6 カ月 ($SD=34$ カ月) であった ($t[44]=.10, p=.92$)。FIQ に関しては, 日本版 WISC-III の標準化データにおける測定誤差の全年齢平均が 3.44 であるため, 95%信頼区間を超えてないように心理的虐待児の FIQ ± 6 の誤差範囲でマッチングした。心理的虐待群の FIQ は平均 86 ($SD=12$) で対照群の FIQ は平均 86 ($SD=11$) であった ($t[44]=.23, p=.82$)。FIQ をマッチングした理由は, 下位検査プロフィールの群間差が FIQ の差異に影響されないように統制するためである。FIQ は基本検査 10 の評価点合計から算出されるため, たとえば対照群の FIQ が著しく高かったとすると, 下位検査評価点における心理的虐待群の特異的な落ち込みが下位検査プロフィールの特徴ではなく, 単に FIQ の差が反映されたものという解釈可能性を棄却できなくなるからである。

結 果

まず心理的虐待群と対照群の WISC-III 下位検査プロフィールにおける全体的な群間差を調べるために多変量分散分析 (MANOVA) を行った。その結果, 両群の下位検査評価点に全体的な差異が検出された (Wilks $\lambda=.47, F[10,$

* 大阪府富田林子ども家庭センター
Osaka Prefectural Government Tondabayashi Child-Family Center

Table WISC-III 下位検査プロフィールにおける平均と標準偏差, および分析結果

下位検査	心理的虐待群		対照群		Paired- <i>t</i> 検定 (<i>df</i> =22)			ロジスティック回帰分析		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	効果量 (<i>d</i>)	オッズ比	95%信頼区間	<i>p</i> 値
絵画完成	8	2	10	3	5.01	.000	1.05	2.35	5.0-1.1	.027
知識	7	3	9	3	3.90	.001	.81	2.56	5.4-1.2	.014
符号	9	2	8	3	.95	.354	.20	1.36	2.3-0.8	.251
類似	8	3	7	3	1.14	.268	.24	.44	1.0-0.2	.055
絵画配列	7	2	8	2	1.16	.259	.24	1.36	2.8-0.7	.392
算数	8	2	8	3	1.32	.200	.28	.55	1.2-0.3	.128
積木模様	9	3	8	2	1.59	.127	.33	.42	1.2-0.1	.103
単語	8	2	8	2	1.06	.302	.22	.62	1.4-0.3	.231
組合せ	8	3	8	3	.32	.752	.07	.85	1.6-0.5	.608
理解	9	3	8	3	.94	.358	.20	.86	1.4-0.5	.544

35]=3.90, $p=.001$, 効果量 [$f^2(V)$]=1.11)。全体的な群間差を確認したので, 続いて 10 の基本検査を個別に比較した。両群の下位検査評価点における平均と標準偏差, および分析結果を Table に示す。Paired t 検定を下位検査の数だけ繰り返したため, 有意水準は Bonferroni の不等式を用いて $0.05 \div 10 = 0.005$ に調整した。その結果, 有意差が確認されたのは絵画完成と知識の 2 下位検査のみであり, どちらの課題においても心理的虐待群の評価点が低かった。下位検査間の相関を込みにした全体的な群間差を MANOVA で確認し, 下位検査間の相関を無視した個別の群間差を paired t 検定で確認したので, 最後に下位検査間の相関を統制(影響を除去)したうえで両群の識別に貢献している下位検査を同定するために, ロジスティック回帰分析を実施した。その結果, 回帰式の妥当性は十分であった ($R^2=.56$)。Table に示したように, 絵画完成と知識の 2 下位検査のみが有意に両群の識別に貢献しており, この 2 つの下位検査評価点が 1 下がると心理的虐待群である確率が 2 倍以上になるとの結果であった。なお外的妥当性の 1 つを支持する結果として, 本研究サンプルの心理的虐待群の FIQ は緒方 (2007) による心理的虐待児の PI と近似していることが確認された。

考 察

絵画完成課題は本質部分と非本質部分を視覚的探索によって見分ける能力を測定しており, 個体が周囲を警戒して見回すヴィジランス行動(vigilance)と関連している。このことから心的外傷後ストレス障害における過覚醒状態との関連も示唆されており, WPSSI-R を用いた研究において絵画完成の評価点のみが有意に高くなるのが被虐待児の特徴であるという報告もある (Frankel et al., 2000)。しかしながら本研究では逆に絵画完成の評価点が低くなるという結果であった。知見の不一致は, Frankel et al. では就学前の幼児のみが対象とされ, 虐待種別に身体的虐待とネグレクトが含まれており, 対照群が用いられていない点で方法が異なるためと考えられる。ただし心理的虐待児のみに限定すれば, 身体的虐待やネグレクトのように生存自体の

危険性が高い虐待と異なり, 症状として過覚醒を生じさせるような影響がないものとも考えることも可能である。ただし他 3 種の虐待群を設けて比較していないため, 本研究知見が心理的虐待児に固有のものか被虐待児全般にみられる特徴なのかを厳密な意味で断定することはできない。加えて, 知識課題の低さは心理的虐待に限らず被虐待児特有の学業達成度の低さと関連していると考えられる (Rowe & Eckenrode, 1999)。虐待という過酷な環境下で生活している被虐待児は注意力や集中力などの心的資源を学業にあてることができないため, 経験によって学習される知識量が少なくなるものと考えられる。さらに絵画完成と知識の両課題の評価点が低かったことを統合的に考えれば, 新規場面への慣れにくさという心理特性を推察できる。この 2 課題は WISC-III 全体を通して最初に実施される 2 つである。したがって検査場面, あるいは検査者への慣れが相対的に少ない条件下で受検しなければならず, 緊張の高い児童はこの 2 つの課題で能力発揮できずに評価点を低めることがある。緊張の高さや新規場面への慣れにくさを別の尺度で測定した実証的な研究は今後の課題となるが, 本研究知見からこのような心理特性を想定することは心理的虐待児の理解を深める意味で臨床上有益と考える。

引用文献

- Frankel, K. A., Boetsch, E. A., & Harmon, R. J. 2000 Elevated picture completion scores: A possible indicator of hypervigilance in maltreated preschoolers. *Child Abuse & Neglect*, 24, 63-70.
- 池 弘子 2006 心理的虐待の定義に関する検討 聖学院大学論叢, 19, 33-46.
- 緒方康介 2007 児童相談所に係属した被虐待児の知的特性 犯罪心理学研究, 45, 15-24.
- Rowe, E., & Eckenrode, J. 1999 The timing of academic difficulties among maltreated and non-maltreated children. *Child Abuse & Neglect*, 23, 813-832.

(受稿: 2008. 11. 7, 受理: 2009. 3. 20)